「フィリポとナタナエル、弟子となる」（ヨハネ福音書一・四三～五一）

1　洗礼者ヨハネとイエス

先週は、一章三五～四二節まで、ペトロやアンデレ、そしてヨハネといったイエスの「最初の弟子たち」がどのようにして弟子になったのか、その次第を、私ども読んだところです。

ただそれは、私どもが知っている、マタイ、マルコ、そしてルカの各福音書にある何か一つの召命物語と称されるようなものでは必ずしもありませんでした。

とはいえ、最初の弟子の中には、このヨハネによる福音書を書いたイエスの愛弟子ヨハネもいるわけですから、ここに伝えられていることの真実を、私ども疑うことはできません。

そこにいろいろ書いてありました。しかし私どもにとってもっとも興味深いことの一つは、イエスの最初の弟子たちが、はじめ洗礼者ヨハネ（バプテスマのヨハネ）の弟子だったということです。

その場合、これは私の一つの想像ですが、ペトロやアンデレ、そしてヨハネといった人たちは、洗礼者ヨハネの、狭い意味での弟子というのではなくて、真剣に神を求め、真剣に自分の生き方を考えて集まってきた人たち、その多くの若者たちの群れの中に、いたのではないかと思うのです。

そうして洗礼者ヨハネのもとに来た人たちに、彼はイエスを指し示したのです。紹介したのです。悔い改めて、救い主が来られるのを待つように。悔い改めた者にはそのしるしとして私は水の洗礼をさずけようと。

洗礼者ヨハネは悔い改めを求めたのでした。ルカによる福音書にこんなことが書いてあります。

> 群衆は「では、わたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは、「下着を二枚持っている者は、一枚も持っていない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」と答えた。徴税人も洗礼を受けるために来て、「先生、わたしたちはどうすればよいのですか」と言った。ヨハネは、「規定以上のものは取り立てるな」と言った。兵士も、「このわたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは、「だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ」と言った（ルカ三・一〇～一四）。

「わたしたちはどうすればよいのか」と言って来た人たちに洗礼者ヨハネが求めたのは、これを見ると、客観的には、何か決して特別に厳しい要求だったとは言えないように見えます。

ヨハネが求めたのは、悔い改めにふさわしい「実」（ルカ三・九）です。ある意味では結果です。

それぞれの立場で、神を信じていると言いながら、隣人を愛しているといいながら実際はそうなっていない。思いは自分だけに、自分の幸せだけに向かっている、そのことを改めよ、ということです。聖書では、悔い改めとは、たんに反省することでもたんに悔いることでもありません。良い実を結ぶことです。それを洗礼者は求めたのでした。

しかしここで少し私ども注意したいのは、いま言ったことと、人の救いとは違うということです。

人は、そのようにして良い実を結んだとしても、前より立派な人間になったとしても、そのことでほめられても、そのことと、その人の救い、その人が救われるということは違うのです。

救いというのは、たとえ人が良い実を結ぶことに失敗しても、たとえ人が立派な人になれなかったとしても、それとは無関係に、その人に価値があるということ、絶対的な価値があるということ、そのことが明らかにされ、そのことが深く悟られることです。その時、その人は、心の底から、自らに満足し、自らを肯定することができるのです。そしてそのようにして生きる力を与えてくださる存在が、神にほかなりません。その神を、私どもに、ご自身のすべて、その生き死にをもって明らかにしたのがイエス・キリストでした。洗礼者ヨハネの証しによって、私どももまたイエスへと目を向けるのです。

2　ガリラヤへ

洗礼者ヨハネからイエスへ、というのが、全体として見た場合、ヨハネによる福音書第一章の流れです。

今日の箇所、洗礼者ヨハネから洗礼を受けるべくガリラヤを出て来たイエスが、ガリラヤへ帰ろうとしていることを伝えています。そのとき、イエスの弟子となったのがフィリポとナタナエルでした。

> その翌日、イエスは、ガリラヤへ行こうとしたときに、フィリポに出会って、「わたしに従いなさい」と言われた（四三節）。

この「行こうとされた」。この言葉には、イエスのお気持ちが、明確に示されているように思われます。

ガリラヤへ帰るといったらよいでしょうか、あるいはガリラヤから宣教を始めるといったらよいでしょうか、どちらにしても、このとき主イエスのこころを大きく占めていたのはガリラヤでした。

ガリラヤとイエスの関係を少し辿るとこうです。母マリアはもともとガリラヤの町ナザレ出身です（ルカ一・二六）。父ヨセフは、ダビデ家の出て、住民登録のためエルサレム近郊ベツレヘム付近に行っていますので、その地と代々関係があったわけですが、マリアと婚約、結婚をするころには、ガリラヤで仕事をしていた人（マタイ一

三・五五）です。

ですが、この家族、聖家族が、ガリラヤを生活の場と定めたのは、幼いイエスを連れて逃れていたエジプトから帰って来てからです。幼児虐殺をおこなったヘロデ大王の支配を逃れて、この王が死ぬまで、エジプトに、いまの言葉でいうと〈難民〉として暮らしていたのです（マタイ二・一三）。

ガリラヤは都エルサレムから見れば、辺境の地です。ガリラヤという言葉がもともと辺境の意味です。

そこには、昔から、異教の民、カナン人も多く住んでおり、中央のエルサレムからは、宗教的にも文化的にも、軽んじられ、さげすまれてきたところでした。今日の箇所のナタナエルの言葉に、ナザレから何か良いものが出るだろうか、という言葉があります。民衆の言葉として、ガリラヤからメシアが出るだろうか、という言葉もヨハネは七章に伝えています（七・四一）。

言葉の上でも、独特のなまりがあったことが、ペトロの裏切りの場面にも明らかです。大祭司の家の中庭で、お前が中で裁判を受けているイエスの仲間であることは「言葉遣いで」（マタイ二六・七三）で分かると言われて、激しく否定したことを思い起こします。

今日の箇所は、辺境の地ガリラヤへと赴き、そこから神の福音を語り始める、イエスの決意を示しています。

エルサレムにいるりっぱな宗教家、地位の高い人、お金持ち、知識人、そうした中で神の民を得ようとしたのではないのです。貧しい人、悲しむ人、疲れている人、義のために迫害される人、苦しむ人、病んでいる人に、神の国を、福音をもたらそうとしたのです。それが神の御心です。「イエスは、ガリラヤへ行こうとした」、この聖書の言葉に、イエスの証しする神の御心を見るのです。「ガリラヤへ」と、弟子たちは、そして私どももイエスに従って赴きます。

3　人の子

イエスがこうした決意のもとにガリラヤへと赴かれたとき、さらに二人の弟子が加わります。フィリポとナタナエルです。

フィリポは一二弟子の一人です。ヨハネによる福音書に何回か出てきます。ナタナエルは、昔から彼を、バルトロマイのことだと見なす解釈があり、そうであれば、彼も一二弟子の一人です。

こうして、先週私どもの見た、ペトロ、アンデレ、ヨハネ、そしてフィリポとナタナエルという弟子たちが、まさに最初の弟子として、イエスと宣教を共にし、初代教会の担い手となるのです。

ところでここに使徒ヤコブの名前が出て来ないのを不思議に思われるかもしれません。ヤコブはヨハネの兄で漁師でした。彼が、ペトロとアンデレ兄弟と一緒に、弟子となったことを私どもマタイやマルコの福音書で知っていまい。じつはヤコブはかなり早い段階で（四三年頃）、ヘロデ王（ヘロデ大王の弟。ヘロデ・アグリッパ）によ

って殺されたのです（使徒言行録一二・一）。ヘロデはユダヤ人の歓心を買うためキリスト教徒を迫害した。ヤコブは最初の殉教者です。

さて、ここでは、ナタナエルのことを取り上げます。彼はフィリポによってイエスのもとに導かれます。

イエスは、ナタナエルが御自分のほうへ来るのを見て、彼のことを、こう言われた。「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りがない」。ナタナエルが、「どうしてわたしを知っておられるのですか」と言うと、イエスは答えて、「わたしは、あなたがフィリピから話しかけられる前に、いちじくの木の下にあなたがいるのを見た」と言われた。ナタナエルは答えた。「ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」。イエスは答えて言われた。「いちじくの木の下にあなたがいるのを見たと言ったので、信じるのか。もっと偉大なことをあなたは見ることになる」（四七～五〇節）。

ここには、イエスとナタナエルの少し複雑な会話が記されています。ポイントはイエスがナタナエルの優れた資質を見抜いて、もっと偉大なことをあなたは見ることになると約束していることです、御自分が何であるか、イエスがナタナエルに明らかにしようとしていることです。

更に言われた。「はっきり言っておく。天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見ることになる」（五一節）。

これは主イエスの言葉です。「はっきり言っておく」という言葉は、もっとも重要なことが語り出されるときの言い回しです。

ここに出てくる、天使たちが昇り降りするというイメージは、ご記憶だと思いますが、創世記でヤコブが、ベテルで見た夢に出てきたものです。そこでもここでも、どちらも、神と人との世界が結びついていることを示しています。

ヤコブの夢では、天使が上り下りしているのは階段です（創世二八・一二）。しかし今日の箇所では「人の子」の上を昇り降りしています。「人の子」とはだれでしょうか。それはイエス・キリストご自身です。「人の子」という言葉は、人間の子供という以外に、旧約聖書ダニエル書（七・一三）以来、終わりの日に現れ、世界支配をおこなう者がイメージされています。それが、イエスに適用されて、この後、この福音書で十字架と復活の救い主として明らかにされていきます。

ナタナエルに対し、ここでイエスが、自らを「人の子」として示したとき、ナタナエルは、まだ何も分かっていなかったでしょう。しかしイエスはナタナエルに「人の子」という言葉で、ですからさし当たり自分を隠しながら、メシアであることを、神の子であることを明らかにしたのです。ナタナエルはその啓示にあずかる光栄を与えられた。主イエスこそまことの救い主、クリスマスは、それが全世界に明らかにされる出来事といってよいのではないでしょうか。

（一二月一八日）